

開催地名：香川県宇多津町	
開催日時	令和3年11月27日(土) 9:30～11:00
開催場所	宇多津町保健センター4階大会議室
語り部	平澤つぎ子 (千葉県旭市)
参加者	自主防災会、防災士会、一般町民 50人以内
開催経緯	<p>南海トラフ地震の発生確率が70～80%になりました。しかしながら今までと同様な考えと対策でしかないのが現状です。行政といたしましても、あらゆる対策を構築していますが自助・共助の中心である一般住民の意識改革が出来ていないのが残念でなりません。</p> <p>実動訓練にプラスして防災講話の実施も必要であると思われます。町民の防災力の向上が喫緊の課題であります。</p>
内容	<p>(1) 震災被害の状況</p> <p>千葉県旭市は銚子市のすぐ隣に位置している。東日本大震災では14:46に震度6弱を記録した。約30分後にも同じくらいの揺れを観測。そして最初の揺れから約1時間後の15:50に津波の第一波が到達した。そこから約30分後の16:20に第二波が到達し、第一波が引いたことで安心して家に戻った方が第二波でさらわれ、亡くなった事例もあった。たった6、7メートルの津波と思われるかもしれないが、14名の方が亡くなられた。津波はコンクリートの橋を壊し、川を遡上する。津波は会場では時速約800kmにもなる。上陸すると速度は落ちるが、それでもマラソン選手でも逃げ切れない。とにかく津波が来たら、速く・遠く・高いところへ避難するべきだと考えている。</p> <p>また旭市で被害が顕著だったのが、津波と液状化だった。もし車を運転しているときに地震が起きたら、キーを挿したまま、車検証だけ持って逃げるのが重要である。</p> <p>(2) 避難所の状況</p> <p>市内では11か所の避難所が開設された。ボランティアとして避難所の炊き出しに参加したが、緊張だけじゃない、切迫した雰囲気だった。農家の方からいただいた7号のお米を2日間炊き、提供し続けた。市役所の方の「まだ足りない、まだ足りない」という声が響き、夢中で作り続けた。市内は半分津波の被害にあったが、残り半分の無事だった人々や市外から食料や飲料の提供があり、間に合ったので幸せだった。寝食を同じ場所で行うので、ほこり、匂い、ごみ、害虫、衛生的に大変だった。また避難者は普段の生活</p>

	<p>とがらりと変わり、衣類、入浴、トイレも満足にできていなかった。女性の着替え場所、子供の泣き声、他人のいびき、食べ物の好み、周りに筒抜けで話ができない、持病、感染症といった問題にも直面した。いろんな状況の中で、必要以上の声はかけず、ただし話し相手や相談相手になりながらボランティア活動していた。全国各地からボランティアに来ていただいたが、地元の高齢者も活躍していた。古い名簿を解読したり、地理的なことを教えてくれたり、貴重な存在だったと感じている。</p> <p>(3) 東日本大震災後の活動</p> <p>東日本大震災で困ったことは、二度と誰にも同じような経験をしてほしくないという思いで今も活動を続けている。防災冊子の配布、心の復興を願った文芸賞の開催、災害関係の紙芝居も作成した。日本全国どこでも地震が起きる。予想されていなかった熊本地震も起きている。自分の命は自分で守らなければいけない。地震発生直後は、とにかく自分の身を守る。命があれば、何とかなる。ただ、準備と知識があるのとないのとではその後が変わってくる。だから、平時の対策が一番大事。災害は忘れたところにやってくるから、どんどん準備をしておくことが重要だ。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>同じ市内でも、被害状況によって避難する側と支援する側の住民がいらっしやった現実を改めて知った。まさに講演に出てきた「自助・公助」を実感した。「消火や避難路を確保するよりも、まずは自分の身を守る」という言葉が印象的だった。自分の身を守った後により良い行動がとれるよう、正しい知識を身につけようと改めて心に誓った。</p>